慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	高等学校英語教育における英語史の活用 : OED Text Visualizerを用いて教科書本文の単語の理解を深める
Sub Title	
Author	森田, 真登(Morita, Masato)
Publisher	慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻『コロキア』同人
Publication year	2021
Jtitle	Colloquia (コロキア). No.42 (2021.) ,p.125- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語学・言語学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00341698-20211220-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高等学校英語教育における英語史の活用

——OED Text Visualizer を用いて教科書本文の単語の理解を深める——*

森田 真登

1. はじめに

近年、英語史の英語教育への応用についての議論がされることが多くなっている。英語教育においての英語史に基づく指導に関して論じた先行研究としては、菊池、寺澤、田辺、堀田などが挙げられる。寺澤は法助動詞と仮定法現在のケーススタディーを通し、英語史の英語教育への貢献の可能性を示している(「変容する現代英語」)。堀田は英語史における語彙借用を、日本語史における語彙借用と比較し、日英対照言語史の視点が英語教育に貢献をなしうると論じている(「英語史教育」)。さらに、英語史の研究成果の英語教育への応用について議論されている論文集である家入編『これからの英語教育―英語史研究との対話―』や、中学・高校の英語教師に向けて書かれた英語史概説書である、片見他編『英語教師のための英語史』なども挙げられる。また、横山や鴇崎では、中学・高校での英語史の知見を活用した授業実践について報告されている。こうした中、本論では、高校二年生を対象とした授業実践を通して、高校英語の語彙指導における英語史的知見の活用の一案を提示する。

2. 英語語彙の特徴について

英語語彙に関して「なぜ同じ意味を表す英単語がたくさんあるのか？」といった疑問を、教師が生徒から問われることは少なくない。そのような生徒からの問いに答えるためには、英語史的視点は不可欠である。本節では、英語語彙を英語史的観点から概観する。

堀田は現代英語の顕著な特徴として、以下の 5 点を挙げている(『英語史』 38-40)。

①世界的な語彙
②単純な屈折
③自然性
④豊富な慣用表現
⑤綴り字と発音の乖離

英語は 350 以上もの言語から語彙を借用しているが、その中でも古ノルド語・フランス語・ラテン語の影響は特筆すべきである。古ノルド語は、アイスランド語、ノルウェー語、デンマーク語、スウェーデン語などの現在の北欧諸語のもとになった言葉であり、英語と同じゲルマン語派に属する。8 世紀半ばから古ノルド語を母語とする北欧のヴァイキングによるブリテン島への侵入が始まった。イングランドのウェセックス王国のアルフレッド

* 本稿執筆にあたり、堀田隆一教授(慶應義塾大学)、石黒太郎教授(明治大学) には数々のご助言とご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

大王は、878 年にヴァイキングとの戦いに勝利し、ウェドモア条約を結び、イングランド北部・東部のデーンロー地域にヴァイキングが居住することを認めることで、彼らのさらなる侵入を食い止めた。デーンロー地域でヴァイキングはイングランドの人々と共存し、それに伴って彼らの話す古ノルド語の単語が英語に入ることになった。古ノルド語の借用語は、後述するフランス語・ラテン語に比べると数は少なく、現代標準英語の語彙に定着している単語は約 900 語である。しかし、古ノルド語から借用された単語は、日常会話でも頻繁に用いられる基本的な単語が多い。call, die, hit, raise, scare, seem, take, thrive, want といった動詞や、anger, birth, egg, fellow, husband, knife, law, root, skin, skirt, sky, window, wing などの名詞、both, ill, low, odd, same, weak などの形容詞、前置詞の till、接続詞の though といった単語も古ノルド語から借用された。さらには、古英語の 3 人称複数代名詞 hie, hira, him は、古ノルド語から借用した代名詞 they, their, them によって置換された。

次にフランス語・ラテン語の影響について概観する。英語はゲルマン語派に属するが、本来のゲルマン系の語彙よりも、フランス・ラテン借用語の割合が大きく、約 6 割を占めているという点は注目に値する。その主な要因は、ノルマン征服(Norman Conquest)とルネサンスである。1066 年のノルマン征服では、イングランド王であったエドワード証聖王の義弟ハロルドを破り、フランスのノルマンディのウィリアムが王位に就く。ウィリアムはフランス語のノルマンディ方言を話し、共にイングランドにやってきた王侯貴族も同様にフランス語を話した。その結果、イングランドではフランス語が公用語となり、公的な文章では主にフランス語が用いられるようになる。そうした中でも、9 割以上の一般庶民は英語を日常生活で用いていたが、次第に大量のフランス語単語が英語に流入することになった。また、近代英語期には、ルネサンスによって、古代ギリシャ・ローマの古典文化への関心が強まり、文献を通じてラテン語・ギリシャ語から単語を借用した。

元々はゲルマン系の英単語があったところに、フランス語などから単語が入ることによって、元々の英単語が駆逐され、フランス語由来の単語だけが残る場合がある。例えば、「おじ」は古英語の eam(母方)、fædera(父方)が、フランス語 uncle によって駆逐され、今では uncle のみが使われている。一方で、元々の英単語が駆逐されずに、どちらも共存する場合もあり、その結果、英語には類義語が豊富に存在しているのである。なお、それらは完全な同義語ではなく、ゲルマン系の英語本来語とフランス・ラテン借用語の間でニュアンスが異なることが多い。寺澤によると、古英語以来伝わる英語本来語は「くだけた・身近な・温かい」といった印象を与える一方で、ノルマン征服以降フランスの支配階級やルネサンス期の学者や知識人によってもたらされたフランス・ラテン借用語は「形式張った・よそよそしい・冷たい」というニュアンスを与える。寺澤は、日本の英語学習者はこのような英語の２系統の語彙を体系的に習得していないことが多く、場面に相応しくない語を選択することがあると指摘している(「グローバルな英語語彙」 94-96)。一般に、英語本来語は日常会話で好まれ、フランス・ラテン借用語は書き言葉などのフォーマルな場面で好まれる傾向がある。例えば、日常会話で「アイスクリームを買いたい」という場合は、堅い響きを持つフランス借用語 purchase よりも、英語本来語の buy や get が好まれる。

I wanna *buy*/*get* ice cream.
? I wanna *purchase* ice cream. (寺澤、「グローバルな英語語彙」 92)

また、言語接触に関して論じた Winford は、より権威のある言語からの単語の大量流入をかつて経験したという点で、英語と日本語は類似していると指摘している。英語がより権威のあったフランス語から語彙を借用したように、日本語はより文明が進んでいた中国から語彙を借用した。特に 6 世紀以降、仏教の伝来とともに膨大な数の中国語の単語が日本語に流入した。結果として現代の日本語の 48%もの語彙は中国語に由来しているのである(34-37)。漢語は借用当時の中国の進んだ文明からもたらされる物や思想と結びつき、和語の上に立つ新たな語彙層を形成した。その結果、冷淡ではあるが高尚な響きを持つ漢語と、日常的で口語的な響きを持つ和語という棲み分けが確立された(堀田、『英語』 110-19)。

古来より話していた和語の上に、文明の言葉である中国語によって漢語という新たな語彙層が形成されたことは、当時のブリテン島に住む英語話者の話すゲルマン系の英語本来語の上に、文明の言葉であるフランス語・ラテン語が新たな語彙層を形成したことと同じメカニズムである。そのため、和語と漢語に見られるニュアンスの差異は、英語本来語とフランス・ラテン借用語に見られるニュアンスの差異に類似している。以下の英文のように、英語本来語は和語で、フランス・ラテン借用語は漢語で訳すと、おおよそのニュアンスの違いを表現できることが多い。

> The fight was brought to an end. 「争いが終わった」
> The conflict was terminated. 「紛争が終結した」 (寺澤、『英語の歴史』 48)

このように、教育現場で生徒から類語の使い分けについて問われた際には、和語と漢語の例を引き合いに出して説明すると良いだろう(表 1)。例えば、古英語由来の buy とフランス借用語の purchase のニュアンスを説明する際には、教師が一方的に説明するのではなく、「『買う』と『購入する』のニュアンスの違いは何だと思う？」とまず生徒に問いかけて、生徒自ら答えを導き出させたうえで、同様のニュアンスの違いが buy と purchase にもあると説明すると効果的である。

表 1. 英語の類義語における、和語と漢語による訳し分けの一例

英語本来語	和語	フランス・ラテン借用語	漢語
begin	始める	commence	開始する
buy	買う	purchase	購入する
choose	選ぶ	opt, select	選択する
fear	恐れ	terror	恐怖
get	得る	obtain, gain	獲得する
give	与える	present, provide, supply	提供する
have	持つ	possess	所有する
help	助ける	aid, assist	援助する
leave	離れる	depart	出発する

let	許す	allow, permit	許可する
make	作る	create	創造する
rich	豊かな	abundant, affluent	豊富な
stop	止める	cease	中止する
think	考える	consider	考察する
word	言葉	term	用語

3. 『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説』の英語史に関連する項目について

『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示) 解説 外国語編 英語編』において、英語史に対する直接的な言及はないが、英語史と関連性が強いと思われるものに、次のような記述がある。

> （7）言語能力の向上を図る観点から，言語活動などにおいて第 2 章に示す国語科と連携を図り，指導の効果を高めるとともに，日本語と英語の語彙や表現，論理の展開などの違いや共通点に気付かせ，その背景にある歴史や文化，習慣などに対する理解が深められるよう工夫をすること。
>
> この配慮事項は，言語能力の向上が，学校における学びの質や，教育課程全体における資質・能力の育成に関わる重要な課題であるという平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申に基づき，国語科の指導内容とのつながりについて述べたものである。
>
> 国語教育と英語教育は，学習の対象となる言語は異なるが，共に言語能力の向上を目指すものであるため，共通する指導内容や指導方法を扱う場面がある。各学校において指導内容や指導方法等を適切に連携させることによって，英語教育を通して日本語の特徴に気付いたり，国語教育を通して英語の特徴に気付いたりするなど，日本語と英語の言語としての共通性や固有の特徴への気付きを促すことにより，言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要である。
>
> 例えば，国語科との連携については，「自分の考えについてスピーチをしたり，それを聞いて，同意したり，質問したり，論拠を示して反論したりする活動」，「話合いの目的に応じて結論を得たり，多様な考えを引き出したりするための議論や討論を，他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動」などについて国語科で学習し，外国語科でのスピーチやディベート，ディスカッションなどの活動に生かすなど，同じ種類の言語活動を通して指導することが考えられる。
>
> また，日本語と英語の語彙や表現だけではなく，高等学校の外国語科において身に付けるべき資質・能力である「思考力，判断力，表現力等」を，「論理的に適切な英語で表現すること」を通して育成する観点から，論理の展開の仕方における両言語の違いや共通点にも目を向けながら英語指導に当たることも，言語的感性を養うことを助け，英語使用に際しての気付きを促す上で有効である。この点は，特に外国語による発信能力の育成を強化する科目群である「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」において，英語で話す・書く際の論理の構成や展開の方法を指導する際に留意する必要がある。しかし，その場合，日本語と英語の共通する点や異なる点を，単なる知識として学習するものではないことに留意する必要がある。
>
> このように，国語科及び外国語科の連携を図りながら，コミュニケーションを図る資質・ 能力が自然にかつ効果的に培われるようにすることが重要である。 (128-29) （下線筆者）

また、授業で扱う教材については次のように述べられている。

３　教材については，次の事項に留意するものとする。
（1）教材は，五つの領域別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を総合的に育成するため，各科目の五つの領域別の目標と２に示す内容との関係について，単元など内容や時間のまとまりごとに各教材の中で明確に示すとともに，実際の言語の使用場面や言語の働きに十分に配慮した題材を取り上げること。その際，各科目の内容の（1）に示す文法事項などを中心とした構成とならないよう十分に留意し，コミュニケーションを行う目的や場面，状況などを設定した上で，言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すこと。
（2）英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活，風俗習慣，物語，地理，歴史，伝統文化，自然科学などに関するものの中から，生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし，次の観点に配慮すること。
（ア）多様な考え方に対する理解を深めさせ，公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。
（イ）我が国の文化や，英語の背景にある文化に対する関心を高め，理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。
（ウ）社会がグローバル化する中で，広い視野から国際理解を深め，国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに，国際協調の精神を養うのに役立つこと。
（エ）人間，社会，自然などについての考えを深めるのに役立つこと。
(137-40)（下線筆者）

なお、以下のように様々な検定教科書において英語史の話題が扱われている。ノルマン征服やルネサンスによる語彙借用という話題から、英単語のスペリング、世界の英語変種、言語接触、意味変化など、英語史と関連の深い様々な題材が掲載されている。

・Revised LANDMARK English Communication I (啓林館)
Lesson 5: “gr8” or great?
メールなどで使われる gr8, b4, pls, BTW などの表現がどのような規則で作られるかを紹介し、その上で、なぜ若い人々はそのような表現を使うのか述べられている。また、当初はメールなどの文で使われていた表現が、日常の英語にも影響を与えていることにも触れられている。こうした表現に反対をする大人もいる一方で、“… language is a living thing and changing all the time.”という肯定的な意見を紹介し、最後には“What do you think?”と読者に問いかけている。

・New Discovery English Communication II (開隆堂)
Lesson 2: Simple Spelling Systems?
英語のスペリングが題材であり、Part 1 では有名なジョークである ghoti[1]にも触れながら、英語のスペリングの複雑さが述べられている。Part 2 ではひらがなとアルファベットを比

[1] ghoti は /fɪʃ/と発音される。enough の<gh>のスペルは /f/、women の<o> は/ɪ/、nation の<ti>は/ʃ/と発音されることに由来するジョークであり、アイルランドの作家 George Bernard Shaw によって広められたとされる。

較し、“The alphabet has only 26 letters, but English has many more sounds. The alphabet can’t represent them all.”と述べられている。Part 3 では、英語のスペリングの利点の一例として、過去形の asked, played, wanted など、異なる発音でありながら同じ-ed というスペリングで表せることを挙げている。なお、ルネサンス期の語源的綴字(etymological respelling)といった、より踏み込んだトピックは扱っていない。

・My Way English Communication II New Edition（三省堂）
Lesson 8: Language Contacts
言語接触についての内容となっており、Sections 1-2 では小笠原諸島で話される英語の影響を受けた日本語を、Section 3 では Tok Pisin やマカオ語を扱っている。さらに Section 4 では、「日本語や英語にも、言語接触はあったのでしょうか」という問いかけがされ、日本語と英語を例に語彙借用の話題が展開されている。

・My Way English Communication III New Edition（三省堂）
Lesson 14: A Variety of “Englishes”
世界の英語変種における、発音や語彙、異なる表現(Have you got a pen?/G’day, mate/Ta など)が紹介され、第 6 段落ではシンガポール英語やインド英語などにも触れられている。第 7 段落では、“We should not hesitate to speak a local variety of English just because it is not ‘standard English.’”と述べられている。

・Vivid English Communication III New Edition (第一学習社)
Lesson 6: Etymology: Wonders of Words
Part 1 では salary や sausage, sauce, salad といった単語が、すべて「塩」を表すラテン語に由来することが述べられている。Part 2 では silly や nice を挙げ、意味の悪化・意味の良化についての内容となっている。Part 3 では、office や meat を例に意味の拡大・縮小にも触れている。Part 4 では、melon, potato, yogurt, sushi のように借用当時から意味が変化していない単語がある一方で、mouse や spam のように当初の意味とは変化した意味でも用いられるようになった単語もあることが述べられている。

・Power On English Communication III (東京書籍)
Lesson 13: English, Always Growing (変化しつづける英語)
第 2 段落でフランス語からの語彙借用、第 3 段落でルネサンス期のラテン語・ギリシャ語からの借用語に触れている。第 4 段落では、今日新たな英単語が作られる方法として、clipping を紹介し、第 5 段落では acronym, 第 6 段落では blending に触れている。第 7 段落では、科学技術の進歩により新たな単語が生まれているということが述べられ、第 8 段落においては、日本を含む世界の言葉からの借用についても説明されている。『ベオウルフ』の写本や、ノルマン征服について描かれたバイユーのタペストリーの写真も掲載されている。

4. 授業実践

日時：2021 年 2 月 15 日(月) 1 限(E 組)、3 限(B 組)
対象：東京都 私立高校 N 高校 2 年生　78 名
教材：UNICORN English Communication 2 NEW EDITION, Lesson 9, Part 1 (Appendix 1)
(今回の活動の前に、Part 1 本文の内容理解は終わらせている)

筆者の勤務する高校において、普段よりコミュニケーション英語 II の授業を担当しているクラスを対象に、教科書本文の単語の理解を深めることを目的とした授業実践を行った。教科書 Lesson 9 Part 1 をデータとし、OED Text Visualizer (https://oed-text-visualizer.oxfordlanguages.com)を用いてグラフを作成した(図 1)。無料で利用可能な OED Text Visualizer は、英文のテキストデータを入力するだけで、語源や初出年代が視覚的に理解できるグラフを *Oxford English Dictionary* の情報を基に自動で作成するというものである。入力したテキストのすべての単語が、グラフ上にバブルの形で表示され、バブルの色は語源を示す。バブルの大きさは入力したテキストにおける頻度を表しており、バブルが大きいほど入力テキスト内における頻度が高いということを表す。グラフの横軸は、初出年代であり、右にいけばいくほどその単語が新しく現れたことを示す。縦軸は、現代英語における頻度を表し、上にあればあるほど現代英語における頻度が高いことを表す。

グラフの生成の際には、自動で品詞分析がなされ、それに応じた位置にバブルが配置されるが、自動であるため正しくない品詞に分類されることもあるので注意が必要である。サイト上で、各バブルにカーソルを合わせるとより詳細な情報を見ることができるが、例えば、“It can respond to simple commands and recognize some faces.” における simple は本文では形容詞であるにもかかわらず、動詞として分類されていた。前置詞の to が不定詞の to と誤って解釈されたことが原因と考えられる。そのため、動詞としての初出年代である 1643 年の位置にバブルが置かれているが、正しくは形容詞としての初出年代の 1225 年にバブルが置かれるべきである。OED Text Visualizer によって自動生成されたグラフを用いる際には、教師が事前にこのような品詞間違いはないかを確認し、本来あるべきバブルの位置との大きな乖離がある場合は、必要に応じて修正をすることが求められる。

また、古英語時代から用いられている英単語について、以下のように述べられている。

> Words from the Old English period (pre-1150 - the shaded area on the chart) cannot be accurately dated in the same way as words from later periods. For Old English words, relative positions on the x-axis are largely arbitrary, and should not be taken to indicate any actual order of first use (OED Text Visualizer).

このように古英語期の単語については、正確な初出年代が反映されていないとの注意がされている。そのため、1150 年以前に関しては、縦軸(現代英語における頻度)は注目してもよいが、横軸(初出年代)においては個々のバブルの細かな位置関係を比較することは避ける必要がある。なお、古英語時代の単語をすべて収録する *Dictionary of Old English* が現在編纂中であり、古英語期のより正確な情報についてはこちらを参照する必要がある。

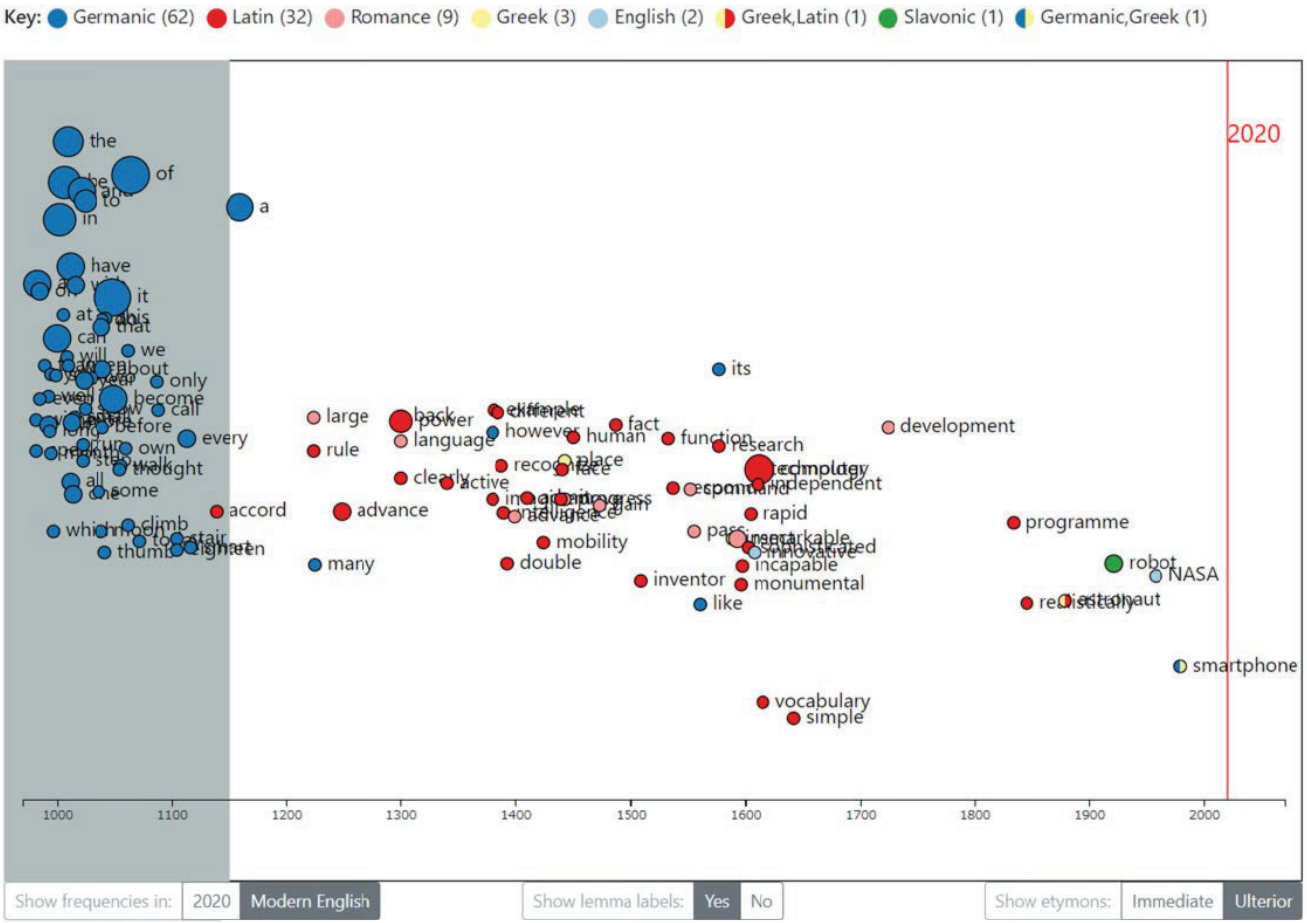

図 1. OED Text Visualizer により作成した UNICORN 2, Lesson 9, Part 1 のグラフ

OED Text Visualizer によって作成されたグラフを生徒に配布し、グラフの読み方を説明した後に、グラフから気付いたことを書き出すように指示を出した。なお、今回の取り組みでは理解し易さを考慮し、Germanic(青色)は「英語本来語」[2]、Latin(赤色), Romance(ピンク色)はまとめて「フランス・ラテン借用語」と考えるよう補足をした。各自、必要に応じて生徒同士で相談しながらグラフの読み解きを行ってもらった。生徒のコメントを以下に抜粋する。

・青色で使用頻度が高いものは英語を習うとき基礎的なものが多い。
・青色の英語本来語は昔にかたまっていて、全体的に文字数が少ない。
・フランス語やラテン語から借りた語は、日本語でいう自立語が多い。付属語(of など)は昔からある。
・一番青の英語本来語が多い。
・英語本来語は頻度の違いが大きい。フランス語ラテン語の頻度は変化が少ない。
・案外、英語本来語が少ない。
・ラテン・フランス語は幅広い年代にあるが、頻度はさほど多くない。
・Lesson 9 の part 1 では、昔に使われるようになった英語本来語の頻度が特に高い。
・最近初めて使われる単語の数が少ない。
・年代が上がっていくにつれて、青が減っている。
・使用頻度の高いものは英語由来のものが多い。
・とりあえず、青と赤が多い。
・グレーゾーン(1000-1150 年)が特に、英語本来語が多く、それ以降は外国からの言葉が多く取り入れられている。
・最近の単語は青が少ない。
・青の方がスペルが短い。
・赤の方がより新しく出来た言葉。
・年代が新しくなっていくにつれて、英語本来の単語だけじゃなく、フランス語やラテン語から借りた単語が増えていった。どんどん混ざっている。
・赤丸は初めて使われた年がバラバラ。
・現代でも英語本来の昔できた単語が多く使われている。
・フランス・ラテン語は唐突に増えている。
・1200 年以降に生まれた単語は、比較的スペルが長めの単語が多いような気がする。
・青のものは文法の基礎となるものが多い。
・最初の方に助動詞や前置詞が生まれた。
・今もなお、単語は増え続けている。

[2] 今回は生徒の理解しやすさを優先し、Germanic(青色)については「英語本来語」と考えるように指示を出したが、Germanic は正確には「ゲルマン系」ということなので、厳密には英語本来語だけでなく、英語と同じくゲルマン語派に属する古ノルド語からの借用語も Germanic に含まれることになる。今回の英文では、call と law は古ノルド語からの借用語である。生徒の興味関心のレベルに合わせて、古ノルド語について補足をしてもよい。しかし、フランス・ラテン借用語に比べると古ノルド語借用語ははるかに少ないため、古ノルド語については最小限の言及にとどめ、むしろノルマン征服やルネサンス、それに伴うフランス・ラテン借用語の増加を強調する方が大切であると考える。

・赤色の方が初出の時代は違えど、全体で頻度が一定だ。
・1100 年頃からフランス語・ラテン語からの単語が増えた。
・青の英語本来語は現代においても、本文中においてもよく使われている。
・1000〜1100 年ごろに青(英語本来語)が集中している。
・冠詞(the)や前置詞(of)などが文章中での頻度が高い。
・前置詞や冠詞は昔に作られた。
・2000 年代に作られたものは少ない。
・英語本来語はスペルが短いが、それ以外の単語は基本的に長い。
・代名詞や冠詞、前置詞などの文法の軸になるような単語は古くから存在していた。
・ロボットやプログラムなどの技術の進歩によってうまれた新たな概念はやはり近代に位置している。
・フランス語は頻度は平均的だが、1200 年以降にたくさん単語ができている。
・グラフで見ると、右肩下がりになっている。
・英語本来語・フランス語・ラテン語がほとんど。
・最初にできた言葉が多く使われている。
・smartphone は最近の単語。

5. 考察

英語史に関する事前知識は無い状態で、様々な重要な点を生徒自ら読み取ることができていた。フランス・ラテン借用語の借用時期や頻度についての言及から、スペリングの長さに着目するもの(一般に英語本来語は比較的スペリングが短く、フランス・ラテン借用語はスペリングが長い傾向がある)、冠詞や前置詞や助動詞といった機能語は英語本来語が多いということを指摘したものなど、幅広いコメントがみられた。また、青いバブル(英語本来語)が多いと感じた生徒もいる一方で、むしろ思っていたよりも少ないと感じる生徒もいたようである。こうして、生徒が考え出した意見を整理し、クラスで共有するだけでも、英語という言語への理解を大きく深めることができるだろう。

一方で、OED Text Visualizer によって作られるグラフは、生徒にとってはやや複雑であり、以下のようにグラフを読み間違えていると思われるコメントも一部で見られた。

・英語本来語は 1100 年以降あまり使われていない。
・年代が新しくなるにつれて、英語本来の単語ではない単語の頻度が上がっている。

情報量が多いグラフであり、その分生徒から様々なコメントを引き出しうるが、一方でグラフの読み取りの間違いもある程度はおこるだろう。そうした点にも配慮し、本取り組みの後には教師からの適切なフィードバックを行う必要がある。今回の取り組みでは、生徒のコメントから私がいくつかをピックアップし、クラス全体で共有をした。その際、「赤のバブル(フランス・ラテン借用語)が現れるのは何年くらいからだろう？」などと改めて全体に質問を投げかけ、ノルマン征服の紹介をした。その後、英語語彙の特徴を紹介したプリント(Appendix 2)を配布し、英語本来語とフランス・ラテン借用語の関係について簡単に触れ、「なぜ英語には同じ意味を表す単語がたくさんあるのか」という疑問につ

いて、いくつかの類義語を挙げて歴史的側面から解説を行った。その際には、教科書本文や単語帳でこれまでに学んだ単語を積極的にピックアップし、それらの類義語を考えるなど、日々の学習とのつながりを感じられる構成になるように心がけた。

6. まとめ

今回のような取り組みを実施する時期としては、高校 2 年次以降が適切と思われる。中学では英語本来語を中心とした基本単語に触れ、高校 1 年次でフランス語・ラテン語に由来する語彙を増やし、そうしてある程度の語彙力がついた高校 2 年次以降に最も効果を発揮するだろう。OED Text Visualizer によって作成したグラフを用いることで、ともすれば教師が一方的に英語史の話を伝えるだけになってしまうところを、生徒自らグラフの読み解きを通して主体的に様々な発見をすることができる。そうして導き出した知識は、単に初めから教師が伝えるよりも、記憶に定着することに疑いない。

もちろん高校における英語教育において、英語史の話をする際にどの程度まで詳細な情報を伝えればよいかは十分に検討する必要がある。高校の英語教育においては、あくまで現代英語の理解を深めることを目的とするべきで、その理解を助ける範囲でのみ、英語史の話をするべきと考えている。たとえばラテン語とフランス語を明確に区別することは、英語史を専門的に扱う際には重要であるが、高校の英語教育においてはどうだろうか。OED Text Visualizer が生成したグラフでは、Latin(赤色), Romance(ピンク色)といった語源情報が示されているが、本実践では、「フランス・ラテン借用語」という簡略化した形で提示をした。なお教師が語源を調べる際には、*Oxford English Dictionary* を参照するのが理想であるが、日本語で書かれている語源辞典としては、寺澤芳雄編『英語語源辞典』が大変有益である。

最近では、高校生を主な対象とした単語帳である『鉄壁』や『必携英単語 LEAP』など、従来の単語帳とは異なり語源についての詳細な記述がある単語帳もでてきている。多くの高校がそのような教材を採用しており、以前よりもはるかに高校の英語教育において接頭辞・接尾辞といった語源知識が活用されてきている。しかし、なぜラテン語系の接辞が英単語にこれほどみられるのかという点に触れられることは少なく、生徒にとっては単なる機械的な接辞の暗記にとどまっていることも多い。様々な単語を英語が借用するに至った英語の歴史を学び、その歴史の中で構築されてきた英語本来語とフランス・ラテン借用語のニュアンスの差異を知り、さらには英語本来語とフランス・ラテン借用語の関係と和語と漢語の関係の類似性に気付かせるという、より深みのある英語語彙指導によってこそ、「日本語と英語の語彙や表現，論理の展開などの違いや共通点に気付かせ，その背景にある歴史や文化，習慣などに対する理解が深められるよう工夫をする」(128)といった指導要領の事項を達成することが可能となるだろう。

Appendix 1

The Future of AI
by Michio Kaku

Part 1

Computer power doubles about every eighteen months. This is a rule of thumb called Moore's law. It clearly shows the rapid progress of computers. According to the law, as the years pass, small gains in computer power become monumental. In fact, your smartphone has more computer power than all of NASA back in 1969, when it placed two astronauts on the moon.

With computer technology advancing, research on robots has become active as well. One of today's most remarkable examples is ASIMO (Advanced Step in Innovative Mobility), which is becoming more sophisticated every year. It can realistically walk, run, and climb stairs like a human. It can respond to simple commands and recognize some faces. It even has a large vocabulary and can speak in different languages. With such remarkable developments, we imagine that robots are about to become as smart as humans before long. However, one of ASIMO's inventors admitted that ASIMO has only the intelligence of an insect. Without being programmed in advance, it can't function at all. It is incapable of independent thought, and it doesn't move of its own will.

Appendix 2 (配布プリント)

●先日行った、スペリングコンテスト 100 問の語源
→英単語において、フランス語・ラテン語由来の言葉の割合がいかに大きいかが分かる。
フランス語・ラテン語：71 語
accomplish, (79)冒険_____, artificial, blame, branch, (11)～を捕らえる_____, cash, chart, (64)～を確かめる_____, disturb, diversity, election, fault, hesitate, illustrate, innovation, (32)知的な_____, (68)学会_____, irritate, notion, operate, persuade, (36)分別のある_____, route, solar, strict, suspect, volume など

英語本来語：26 語
alive, beat, (86)繁殖する_____, deeply, dive, everywhere, evil, feather, lend, length, somewhat, (26)しっぽ _____, (31)本当に_____ など

古ノルド語：1 語　scared
ギリシャ語：1 語　(47)なぞ_____
アラビア語：1 語　(21)アルコール飲料_____

●英単語の歴史
449 年　ヨーロッパ大陸から現在英国があるブリテン島に、アングル人、サクソン人、ジュート人と呼ばれるゲルマン民族が来る。彼らが話していた言語が、英語の元となる。一般に、彼らがブリテン島に来た 449 年を英語の歴史の始まりと考える。

1066 年　ノルマン征服(Norman Conquest)
フランス語を話すノルマン人であるノルマンディー公ウィリアムが、イングランド王であったエドワード証聖王の義弟ハロルドを破り王位に就く。ウィリアムと、彼と共に来た貴族はフランス語を話し、これ以降 250 年ほど、英語ではなくフランス語がイギリスの公用語となる(ただし、人口の 10%ほどの貴族を除いた、その他のイギリスの人々は引き続き英語を使っていた)。この出来事をきっかけに大量のフランス語が英語に入り、新たな英単語として定着する。政治、法律、宗教、料理、芸術などの様々な分野において大量の語彙を英語にもたらした。

16～17 世紀頃　ルネサンスによって、古代ギリシャ・ローマの古典文化への関心が強まり、ラテン語・ギリシャ語が英語に入る。

結果として、現代英語においては、以下のような語彙構成になっている。
- フランス・ラテン語借用語：57%
- 英語本来語・ゲルマン系：16%
- ギリシャ語借用語：4.5%
- その他の言語

(唐澤、『英語のルーツ』27)

●おまけ：古英語の文章　『アングロ・サクソン年代記』(A 写本) 西暦 449 年の記述

Hengest and Horsa from Wyrtgeorne geleaþade Bretta kyninge gesohton Bretene on þam staþe þe is genemned Ypwinesfleot, ærest Brettum to fultume, ac hie eft on hie fuhton. Se cing het hi feohtan agien Pihtas, and hi swa dydan and sige hæfdan swa hwar swa hi comon. Hi ða sende to Angle and heton heom sendan mare fultum and heom seggan Brytwalana nahtnesse and ðæs landes cysta. Hy ða sendan heom mare fultum.

(和訳) ブリトン人の王ウィルトイェオルン(ヴォーティガーン)に招かれたヘンゲストとホルサが、ブリテン島のイプウィネスフレーオト(エブスフリート)と呼ばれる海岸にやって来た。当初、彼らはブリトン人たちの救援のために来たが、やがて彼らと戦うようになった。この王は彼らにピクト人たちと戦うよう依頼し、彼らはそれに従い、行くところはどこででも勝利を収めていた。それから彼らは(故郷の)アンゲルンに使者を送り、より多くの援軍を送るよう頼み、またブリトン人が取るに足りないことや、その土地の素晴らしさについて伝えた。そこで彼らはより多くの援軍を送った。

(唐澤、『世界の英語ができるまで』22-23)

●生きている動物は英語本来語⇔食卓に出るとフランス語

動物を育てる農民は英語を話し、それをフランス語を話す貴族が料理として食べていた。

ox-beef　　sheep-mutton　　deer-venison　　swine(pig)-pork

●なぜ、英単語には同じ意味を表す単語が複数あるのか？

→元々英単語があったところに、フランス語やラテン語から単語が入った。

①元々の英単語が駆逐されて、フランス語だけが残った。

例：「おじ」は古英語の eam(母方)、fædera(父方)が、フランス語 uncle によって駆逐されて、今では uncle のみが使われている。

②元々の英単語が駆逐されずに、どちらも共存した。

→ただし、その場合は、完全にイコールではなく、ニュアンスが違うことが多い。以下の傾向がみられることが多い。(※あくまで傾向なので最終的には辞書で確認すること)

・英語本来語：くだけた・身近な・温かいニュアンス。会話で好まれる。
・フランス・ラテン語借用語：形式張ったニュアンス。文章やフォーマルな場面で好まれる。

※中学で習ったような基本単語は、英語本来語と考えてよい。一方で、高校に入ってリーディングなどで習う単語は、フランス・ラテン借用語でフォーマルな響きを持つものが多い。また、英語本来語はスペルが短く、フランス・ラテン借用語は長い傾向がある。

英語本来語―フランス・ラテン借用語
help- aid, assist
ask- question, inquire
begin- commence
get to- arrive at

holy- sacred
fear- terror
time- age
give- provide, present[3]
enough- sufficient
let- allow, permit
older- senior
choose- select, opt
fight- battle
get- obtain, gain
can- be able to do, be capable of doing ※ただし、意味的には似ているが品詞が異なる
think out(up)- devise
think- consider
kind- benign

[3] 下線の箇所は、生徒への配布プリントでは実際は書かれておらず、生徒が書き込む形とした。なお、これらの穴あきの箇所はすべて、本学年で学期ごとに実施している「スペリングコンテスト(英単語 100 問テスト)」で出題された単語、又は、定期テスト範囲の Lesson 9, part 1, part 4 で使われている単語である。現在学んでいるフランス・ラテン借用語を、既習の英語本来語と関連づけることを試みた。

参考文献

浅見道明他 『Power On English Communication III』 東京書籍、2021 年。

家入葉子編 『これからの英語教育—英語史研究との対話— Can Knowing the History of English Help in the Teaching of English? (Studies in the History of the English Language, 5)』 大阪洋書、2016 年。

市川泰男他 『UNICORN English Communication 2 NEW EDITION』 文英堂、2019 年。

片見彰夫他編 『英語教師のための英語史』 開拓社、2018 年。

唐澤一友 『英語のルーツ』 春風社、2011 年。

唐澤一友 『世界の英語ができるまで』 亜紀書房、2016 年。

菊地翔太 「現代英語における譲歩を表す前置詞—英語史研究の英語教育への貢献—」『専修人文論集』第 97 号、2015 年、375-91 ページ。

児馬修 『ファンダメンタル英語史』 ひつじ書房、1996 年。

竹内理他 『Revised LANDMARK English Communication I』 啓林館、2020 年。

竹岡広信 『必携英単語 LEAP』 数研出版、2018 年。

田辺春美 「英語史は役に立つか?—英語教育における英語史の貢献—」『成蹊英語英文学研究』第 21 号、2017 年、95-113 ページ。

築道和明他 『Vivid English Communication III New Edition』 第一学習社、2021 年。

鉄緑会英語科編 『改訂版　鉄緑会東大英単語熟語　鉄壁』 KADOKAWA、2020 年。

寺澤盾 『英語の歴史　過去から未来への物語』 中公新書、2008 年。

寺澤盾 「変容する現代英語—英語史と英語教育の接点」『関東英文学研究』第 8 号、2016 年、11-18 ページ。

寺澤盾 「グローバルな英語語彙—英語史から語彙教育へ—」『これからの英語教育—英語史研究との対話— Can Knowing the History of English Help in the Teaching of English? (Studies in the History of the English Language, 5)』 大阪洋書、2016 年、89-104 ページ。

寺澤芳雄編 『英語語源辞典』 研究社、1997 年。

鴇崎孝太郎 「中学校・高等学校における英語史教育 : 英語史の知見に基づいた名詞の不規則変化、綴り字・発音に関する指導報告」*Asterisk: An Annual Journal of Historical English Studies* 第 28 (111)号、2019 年、131-40 ページ。

生井健一他 『New Discovery English Communication II』 開隆堂、2021 年。

橋本功 『英語史入門』 慶應義塾大学出版会、2005 年。

堀田隆一 『英語史で解きほぐす英語の誤解』 中央大学出版部、2011 年。

堀田隆一 『英語の「なぜ？」に答える はじめての英語史』 研究社、2016 年。

堀田隆一 「英語史教育における日英対照言語史の視点」*Asterisk: An Annual Journal of Historical English Studies* 第 28 (111)号、2019 年、153-67 ページ。

松浪有編 『英語の歴史』大修館書店、1995 年。

水本篤他 『Word Navi 英単語・熟語 4500』 啓林館、2013 年。

森住衛他 『My Way English Communication II New Edition』 三省堂、2021 年。
森住衛他 『My Way English Communication III New Edition』 三省堂、2021 年。
文部科学省 『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 外国語編 英語編』 2018 年、www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf.
横山利夫 「英語教育と英語史 : 高等学校での授業実践報告」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』第 41 号、2014 年、29-37 ページ。
Dictionary of Old English, www.doe.utoronto.ca/pages/index.html. Accessed 10 Sept. 2021.
OED Text Visualizer, oed-text-visualizer.oxfordlanguages.com. Accessed 10 Sept. 2021.
Oxford English Dictionary, www.oed.com. Accessed 10 Sept. 2021.
Winford, Donald. *An Introduction to Contact Linguistics.* Blackwell, 2003.